

獄翼羽譚

春夏秋冬東西南北

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは地隼の幻想入り

分からない人は東方幻想譚を読んでください

目次

0話 「手記集」	1
1話 「地隼とxxの出会い」	4
2話 「xxx巡り」	6
3話 「現在に至るまで」	8

0話 「手記集」

x x月 x x日

今日は森で男の子を見かけた。
楽しそうに遊んでいて一緒に遊びたかった。
でも声をかけられなかった。

また見つけたら、今度は声をかけてみよう。

x x月 x x日

今日もあの男の子を見かけた。

追いかけて行ってみたらその子崖から足を滑らせて落ちちゃったの。

急いで崖の下に降りてみたら、その子は傷だらけで呼吸も浅かった。

取り敢えず、血をその子のために分け与えた。

その子は一命をとりとめて安心していた。でも、そう思えたのもつかの間だった。

その子は記憶の一部をなくしてしまった。

自分の名前すら忘れてしまうぐらいの。

だから私はその子に“颯天”という名前を付けた。

気に入ってくれたみたいで自分でも何の違和感もなく名乗れようになった。

でも、“禍ツ龍”の子である私の血をわたしてしまってもよかったのだろうか？

x x月 x x日

颯天にもふつつう見えるはずのないものが見え始めた。

颯天にも真実を伝えるべきだろうか、いや、やっぱりやめておこう。

颯天に「私たちと一緒にいるのはいや？」って聞いたけど颯天は「うん」って答えた。

ちなみに颯天の能力は力を無限に生み出す程度の能力だから、少しどころか相当危険な能力だなって思った。

x x月 x x日

颯天が夜に出歩なくなった。
どこに行ってるんだろう。

そんな颯天が心配でついていってみた。
別に心配するようなことは何もなかった。

x x月x x日

颯天が自分の能力の可能性に気がついた。

父さんは颯天を殺そうと言っているけどそんなことしたくない。
だって、颯天は、私、私のお兄ちゃんだから。

x x月x x日

父さんが颯天の記憶の一部を消そうって言いだした。

殺すよりも私の気がマシなので父さんの言うことに従った。

x x月x x日

朝から颯天がいない。

颯天は何処へ行ったのだろうか？

明日また探してみることにする。

x x月x x日

夢の中八雲紫というやつに幻想郷に颯天はいる。

と言われた。でも私の家族と離れたくはないし、でも颯天に会いた
いし。

x x月x x日

幻想郷というところに来てから気づいたが、

生命力を有する核を生み出す程度の能力が使えなくなっていた。

この世界のどこかにいるのだろうか？

あれが暴走したら世界一つ壊しかねない。

あれは、核に魂を吹き込んで生命を作ってしまう。

その生命には意思は生まれず、世界を壊し続けるかもしれない。

追加設定

一応月日の流れにこんな設定を設けていました

龍から見た人のたどる道ということ

始原の月

開拓の月

変遷の月
夢幻の月
流転の月
前兆の月
争乱の月
平定の月
再乱の月
不変の月
絶滅の月
終焉の月

日付の設定としては

静烈と甲乙丙丁と花鳥風月を組み合わせる32この日が出てきた
した（笑）

1話 「地隼とXXの出会い」

XX月XX日

今日は森で男の子を見かけた。
楽しそうに遊んでいて一緒に遊びたかった。
でも声をかけられなかった。

また見つけたら、今度は声をかけてみよう。

XX月XX日

今日もあの男の子を見かけた。

追いかけて行って見たらその子崖から足を滑らせて落ちちゃったの。

急いで崖の下に降りて見たら、その子は傷だらけで呼吸も浅かった。

取り敢えず、Xをその子のためにXXXXXXXXXXXXXた。

その子は一命をとりとめて安心してた。XXXXXXXXXXXXX。

その子はXXXXXXXXXXXXX。

自分のXXXXXXXXXXXXXぐらいの。

だから私はその子にXXというXXXXXX。

気に入ってくれたみたいで自分でもXXXXXXXXXXXXXた。

でも、XXXXXXXXXXXXXである私のXをX
Xしてしまってもよかったのだろうか？

XX月XX日

XXにもXXXXXXXXXXXXXが見え始めた。

XXにもXXXXXXXXXXXXX、XXXXXX

XXXXXXXXXXXXX。

XXに「XXXXXXXXXXXXX」って聞いたけどXXは

「XX」って答えた。

ちなみにXXのXXはXXXXXXXXXXXXXだから、少
しどころかXXXXXXXXXXXXXって思った。

XX月XX日

××が×に××××××××××なつた。
××××××××××。

そんな××が××でついていってみた。

別に××するようなことは何もなかった。

××月××日

××が自分の××の××××××に××××××××た。

××××は××を××××と云っているけどそんなことしたくない。

だって、××は、私の、私の××××××××××だから。

××月××日

××××が××の××の一部を××××××××××て言い出した。

××××よりも私の気がマシなので××××の言うことに従つた。

××月××日

朝から××がいない。

××は何処へ行つたのだろうか？

明日また探してみることにする。

××月××日

夢の中で××××というやつに××××に××はいる。

と言われた。でも××××と離れたくはないし、でも××に会いた

いし。

日記はここで途切れている。

「あれ？此処は何処？私は地隼」

「何をしに来たんだっけ？」

「この建物は・・・神社？」

ここは、きつと山の頂上なんだろう。

紅葉がきれいだなあ。

そんないつも見ない景色に見とれていると

「あれ？人間とは珍しいですね。」

「参拝ですか？」

中から巫女服を着た翠髪の少女が出てきた。

「いえ、違います」

これが私の幻想入り

2話 「XXX巡り」

XX月XX日

XXXというところに来てから気づいたが、
XをXXXXXXXXXが使えなくなっていた。
この世界のどこかにいるのだろうか？

あれが暴走したら世界一つXXXXXXXX。

あれは、XにXをXXXXXでXをXてしまう。

そのXXにXXはXXXず、世界をXXX続けるかもしれない。
翠の髪の少女はこう続けた。

「じゃあ、どうしたんですか？」

「ここは、守矢神社です。」

「そうですか…」

そう流しつつ、私は、綺麗な山々へ足を向けていた。

「ちよつと！」

急に、呼び止められて私は、振り返る。

「はい？」

「こんな真っ暗でどこ行く気ですか？」

はて？何のことだろう？

外はこんなに明るいのに…

「行くアテがないならうちに泊まって行ってください。」

「じゃあ、お願いします…」

ふと、体が軽いなど思い自分の体を見下ろした。

……

「なんじゃこりゃー!!!」

え、ちよつと待つて、何この姿…

自分の感覚で手足が動かせる…

やっぱり私の体なんだよね？

「あの？こんな夜中に叫んだら妖怪が寄ってきますよ…」

ん？妖…怪…？

「やっほー!!」

と、私は大きな声で叫んだ。

「ちよ、やめてください……」

「ヤフー」

山の方からそんな声が聞こえた気がした。

「そういえば、あなたは？」

「私はこの神社の巫女の東風谷早苗です。」

「私は、地隼っていうんだ。よろしくね。」

××月××日

昨日は早苗という人に神社に泊めてもらった。

ここにはお父さんはいないから検閲をされることもないだろう。

あの、妖怪が言っていたことが正しければ颯天はここにいないはずだ。

そういえば、あの颯天が唯一覚えていたことがあった気がする。

何だったかな？

と……、と……、何だっけ？

あと昨日地震が起こったようだ。

このままだとあの能力のせいでたくさんの人が犠牲になりかねない。

一刻も早く颯天と、生命力を有する核を生み出す程度の能力を見つけないければ……。

早くこの世界から立ち去らないと、獄の翼、地獄の羽と恐れられていた私だ。

どんな影響を与えてしまうかわからない……。

「あ、早苗さん。おはようございます。」

「今日はどうされるのですか？」

「クソ、ゴミ、馬鹿、屑、徘徊兄貴を探しに行きます。」

「この世界にいる保証はあるのですか？」

「なんか、私をここに連れてきた妖怪がここにいて言っていたらしいんじゃないかな？」

「そうですか。なら、博麗神社に行かれてはいかがですか？」

「じゃあ、そこに行ってください。」

3話 「現在に至るまで」

××月××日

早苗さんに言われた通り一度人里に出て博麗神社というところに向かうために

この紅葉が美しい、妖怪の山を言う山を滑り落ちないように一歩一歩慎重に

少し地割れした地面を歩いてた

そして、颯天は何処に行ったのだろうか？

まあ、そのことについては自分の血ぐらい自分で探せるから。

それよりも問題視するべきは生命力を有する核を生み出す程度の能力がどこかにいることだろう

「やっぱりこの山はきれいだなあ」

そんなことは言いつつも、山って上るときも下るときも大変だなあと思う私がいた（笑）

そこからは道行く妖怪に人里への下り方を聞きながらこの山を下って行った。

数分して・・・

結局此処は何処ですか？

迷いました（笑）

「お姉さんは人間？」

妖怪かあ、妖怪ならいいか。

「いや、私は『龍』だよ」

「そーなのかー」

あ、そうだ

「ねえ、博麗神社っていうところに連れて行ってよ」

「いーのだー」

「ここだよー」

「ありがとう」

さて、賽銭も入れたし呼びますか。

「だれかー」

.....

返事がない、ただの屍のようだ

数分後

いい加減遅いなあ

「だーれかー、いませんかー？」

「そんな大きな声出さなくても聞こえてるわよ！」

ビツクリした

そんな声と同時に神社の奥から紅白の服を着た巫女さんが出てきた。

「あの、すいません。ここに馬鹿、屑、ゴミ、自己制御不能兄貴（颯天）が来ませんでしたか？」

「・・・あなた、建前と本音が逆になってるわよ」

「あ、そうか。颯天を見ませんでしたか？」

「昨日の夜まではいただけだね。」

「そうですね。ありがとうございます。」

となったら自力だ探すしかないわね。

しばらく歩いて再び魔法の森

「?どっかから」陰影の気がする」

その気がするほうに向かって私は少し駆け足で進んでいく。

「こんなところから・・・」

そして現在

「んで、行ってみたら颯天だった、正確には勢いを殺す程度の能力だけだね。」

「なるほどなあ、ところで、生命力を有する核を生み出す程度の能力の所在は検討ついているのか？」

「んー、陰影とかその他もろもろは一度外に出た場所に寄りやすいついていうから・・・」

「なら、地霊殿か・・・」

そういうと神社の中から二人は立ち上がり山を下って地霊殿に向かっていくのであった。

××月××日

やっと颯天に出会えたと思ったら、颯天は勢いを下す程度の能力の
“陰影”を暴走させていた。

取り敢えず古明地さとりっていう妖怪が助けてくれて事なきを得
たが、

颯天は倒れたままなので、守矢神社に向かうことにした。